松浦武四郎と紋別・渚滑川

報告:しょこつがわ連携研究会　　髙橋　浩徳

武四郎の蝦夷踏査

第1回 1845(弘化2)年 28才

第2回 1846(弘化3)年 29才

第3回 1849(嘉永2)年 32才

第4回 1856(安政3)年 39才

第5回 1857(安政4)年 40才

第6回 1858(安政5)年 41才

三度

紋別に！

第１回蝦夷地調査　1845（弘化２）年 ２８歳

　初めての蝦夷地調査で、武四郎は函館から太平洋側の海岸線を歩いて知床岬へと達しました。

　武四郎は古くから独自の文化を育んできたアイヌの人々に案内をしてもらいながら、調査を進めました。（75日間）

第2回蝦夷地調査　1846（弘化3）年 29歳

　第2回の調査では江差から日本海側の海岸線を歩き、宗谷からカラフト（今のサハリン）南部を調査。

　宗谷の戻ると、オホーツク海側の海岸線を歩き、知床岬へと達します。これにより、北海道の海岸線をほぼすべて歩きました。（175日間）

第2回目(初めて紋別へ) 再航蝦夷日誌より

弘化3年7月24日(西暦1846年9月14日)宿泊

・15時前に運上屋に着く。弁天社が美しい！

・渚滑川を遡る。

1里も上ると流れが速くなり、両岸には石がころころと転がっている。山は椴がうっそうとして見えない。

↓

16時過ぎに鮭が沢山遡上しているのを見て驚く。

↓

17.8丁(1.7～1.8km)上ると、黒曜石があり、2.3個持ち帰る。

↓

半里行くと浅瀬があり、上陸。夕暮れの景色を眺める。

↓

19時には運上屋に戻る。

第3回蝦夷地調査　1849（嘉永2）年 32歳

3回目：嘉永2年(1849) 武四郎 32歳

第3回は函館から船に乗り国後島、択捉島を調査しました。
（57日間）

第4回蝦夷地調査　1856（安政3）年 39歳

4回目：安政3年(1856) 武四郎 39歳

向山源太夫を隊長とする調査隊の一行に加わった武四郎は、函館から日本海側を北上し宗谷まで行くと、北蝦夷地（旧カラフト、今のサハリン）へと渡り、中部のシツカ（旧敷香、現ポロナイスク）まで調査して、宗谷からオホーツク海側、太平洋側をまわって函館へ帰りました。

途中で隊長が病死し、武四郎自身も函館に戻ると、死を覚悟した辞世の和歌を詠むほどの重い病に倒れてしまいました。（192日間）

第4回目(2度目の紋別)　廻航日記より

安政3年８月24日(西暦1856年9月22日～27日)宿泊

８月24日 当初予定通り運上屋宿泊
25日 〃
26日 大雨で滞留
午後2時過ぎ空が暗くなる
↳ 道南駒ケ岳の噴火による
27日 嵐の影響で波が荒く、歩けずに滞留
28日 出発

シヨコツ → モンヘツ → シユフヌツナイ

シヨコツ

川巾37間。 昔は50軒、今は23軒。

「川筋の2人の小使いは80歳を過ぎている。子も孫もソウヤへ取られている。」

上流には、

- ウツ → 宇津々
- ヲワフン → 和訓辺
- タトシ → 立牛
- ウエンコタン → 上古丹
- シルトルマフ → 白鳥
- シヤンル → 札久留（？）

ここにも2軒ある。
子ども3人だけの家と、
4人の子を取られた老人
一人暮らしの家

1日堅雪の上を歩いて山頂を超えると天塩川すじの名寄に出る。

シヨコツ

↓

モヤシヤン　～入り江・奥

↓

ホンチカフ（ポン・チカプ・ノツ）　～小さい・岬

↓

チカフノツ（チカプ・ノツ）　～鳥・岬

↓

ウエンシラリ　　～悪い・磯

↓

ヲン子ノトロ（オンネ・ノツ・オロ）～大きい・岬・所

「今はここをモンヘツと言う。」

文政5(1822）年
～
天保9(1838)年
の間に藻別川河口付近から番屋を移して運上屋とした。

モンヘツ

昔は80軒、今は34軒。(渚滑川河口のモヤサンまで含む)

・惣乙名は、サントアイノ（87才）子はソウヤへ。

・小使いの独身の娘はソウヤへ。

・ニシタコスは妻と共にソウヤへ。（家は朽ち果てる）

・トウキツは弟・妹と共にソウヤへ。

・セトクアイノは病気の老婆を残してソウヤへ。

嘆きと怒り
そして
使命感が

「人口が減っていくのは当然のことだ。
年頃になると嫁もとることなくソウヤ場所へ連れていかれると言うのだから耳も目も当てられない。」

モンヘツ

↓

ホンウエンヘヲマナイ

・海岸の崖が崩れ、珪藻土が出ている。
・海岸には砂鉄がある。

↓

コ　ム　ケ

↓

シユフヌツナイ

第5回蝦夷地調査　1857（安政4）年 40歳

5回目：安政4年(1857) 武四郎 40歳

病から回復した武四郎は、予定していた樺太調査を変更して、かねてより希望していた石狩川や天塩川を河口から上流部まで遡る調査を行いました。（146日間）

第6回蝦夷地調査　1858（安政5）年 41歳

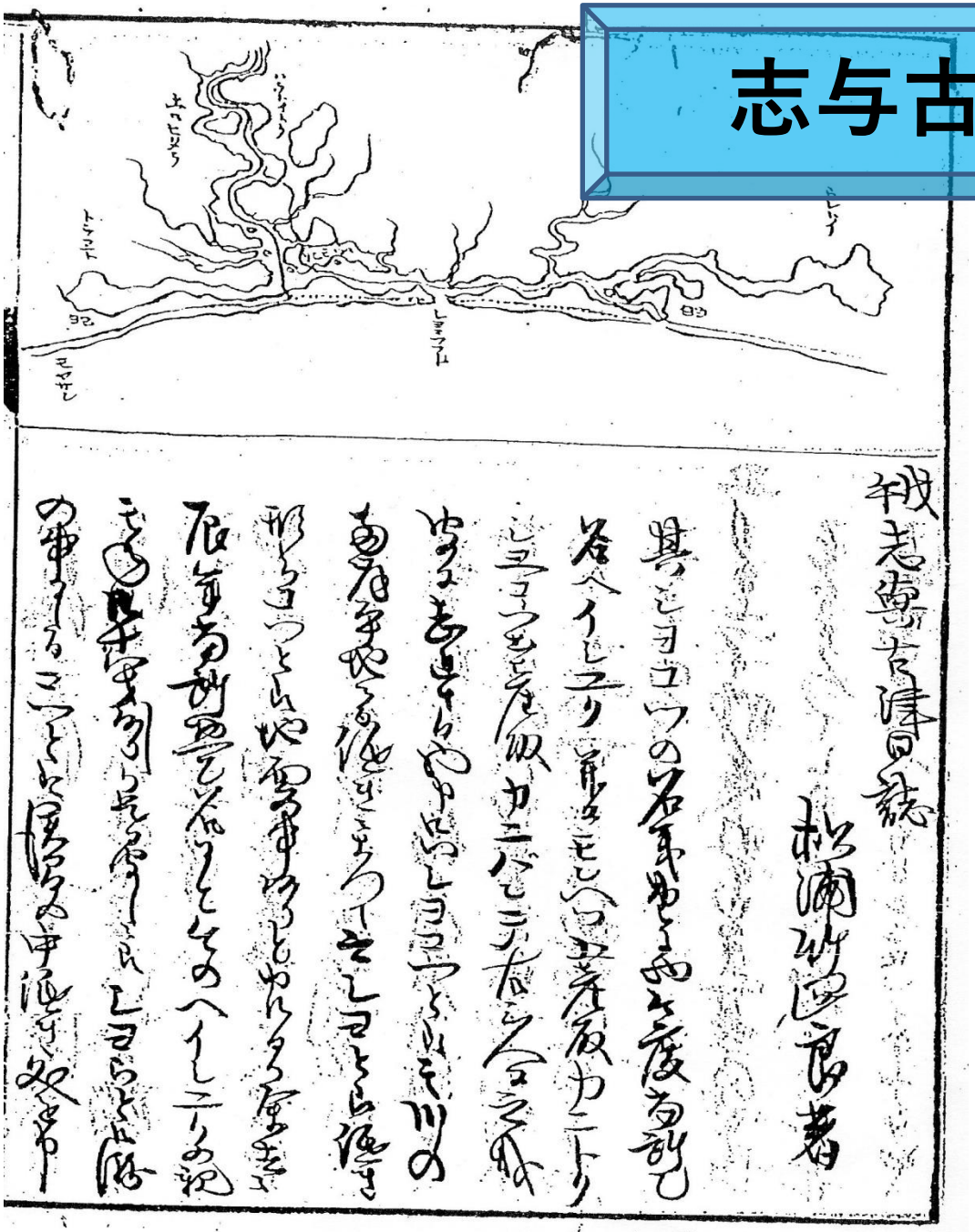
　蝦夷地のほぼすべての海岸線と日高地方の河川、十勝、道東地域の内陸部の調査を行いました。(203日間)

※このときの調査報告書は、「戊午東西蝦夷山川地理取調日誌」と題して、62冊にまとめられました。

滝上にやってきたのはこの時です。

オシラネップ川と渚滑川の合流点まで来ました。5月27日のことです。（西暦では1858年7月7日）

志与古津日誌



安政5（1858）年5月26日～5月28日
（西暦7月6日～8日）

「松浦家所蔵」

#3
#1
#2
#2
#3
3
4
5
6
7
国道交差点
③ベツモシリ　1軒
（川・島）
⑥パラトウイトウ　2軒
（広い・沼・奥）
⑦ホロヒタラ　2軒
（大きい・小石川原）

[ベツモシリ]

[ホロヒタラ]

昨年函館奉行に畑作を教えてもらったアイヌに聞いて、山を切り開き約1町の畑を作り、大根、ネギ、麦の3種類を蒔いている。
誰も作り方を教えてくれないので、日陰となる枝を払っていない。
教本を与えず先生もつけずにほおっておくのと同じ事だ。
独り悲しみの涙をぬぐった。
ウエンノツ
（悪い・岬）
＊昼食
休憩地
#4
8
四つ葉大橋
6
7
四つ葉工場
R273

[四つ葉大橋よりウエンノツ方面を望む]

[ウエンノツ]

《調査しながらアイヌ民族の風習を書きとる①》

⑩キナチヤシナイ～敷きものにする草・刈る・よくする・沢
（キナ・チャ・ウシ・ナィ）
⇒赤タモの木が多い。少し上流に民家がある。
生い茂った樹木の中に少しの畑を作っている。

⑪ウツナイ～脇・沢　　**宇津々川**
（ウツ・ナィ）　　ウツカ・ナィだと瀬の沢
⇒昔は大きな瀬があって舟を引き上げた。

⑫ショウマナイ～津波・沢
（スオマィ・ナィ）
⇒山の下の方は崖になっている。
昔津波があった時にここまで大きな船が上がった。

⑬チトカンヒラ～我ら・矢を射る・崖
（チ・トゥカン・ピラ）
⇒右の方は大きく崩れ白肌の崖になっていて滝がある。
アイヌは上る時にはイナウを置き、下る時には矢を射る。

⑭シユマウニ～石・ある・所
（スマ・ウニ・ィ）
⇒昔はアイヌの集落があったが、今は墓所だけが残っている。ここを通る時は煙草を一・二服ずつ手向ける。

《調査しながらアイヌ民族の風習を書きとる②》

⑰チライオツ～イトウ・多くいる
（チライ・オッ）
この少し上流の**ライベツにて宿営**。案内人の飼犬が追いかけてきて寝ている所に首を突っ込んでくるのには甚だ困った。

23シユマムイ～石・入り江の様に入り組んだ所
（シユマ・ムイ）　　**上渚滑**

24イチヤヌニ～サケマスの産卵場・ある・ところ
（イチャ・ヌニ・イ）
小川にして浅い。
右側に昔、アイヌの集落があった。墓所が残っているので皆煙草を手向ける。

《いよいよ渚滑川踏査最深地へ》

26チャシコツ
～砦・跡
昼食休憩

29タツシ
～樺・ある所
2泊目宿営地

タツシからヲシラン子フまでは、山沿いに徒歩で踏査。
16時頃出発！

「此処より上は舟行きがたき」

二人は随行。
二人は宿営準備。
流木を集めて小屋を建て、屋根はふきの葉で葺く。

踏査最深地点
ショコツ第二の支流。

上流から犬を二頭連れたアイヌが来た。
夜まで　色々聞き、河口まで一緒に下る。

草が深くて困ったが、少し上へ上がると茅野になりとても見晴らしが良くなった。
この道をまっすぐ南に進んだ。

《オシラネップ川筋の様子～イホレサンによる》

＊７．８丁入るとヲヲセウシ（ウォセ・ウシ・イ～狼・多い・所）　⇒　オセウシ川
～古老によると狼がいたのではなく、誰かが叫んだ所

＊７．８丁でチロンノトセトシナイ（チロンヌプ・セト・ウシ・ナィ～テン・巣・多　い・所）
⇒　狐沢川（営林署地図では六百貫沢）
～昔テンを獲りに来て家を建てた。今もその跡がある

＊しばし行ってフシナイ（ブス・ナィ～トリカブト・沢）
⇒　パンケプシナイ川（パンケは「下流の」、ペンケは「上流の」の意味）

＊しばし行ってヘヘロナイ（ペペロ・オ・ナィ～ユキザサ・沢山ある・沢）
⇒　ペペロナイ川

＊ここから左がシイヲシラン子フ（シ・ヲシラン子フ～本当の・オシラネップ川）
～その後ろ側に高い山マウレセツフノホリ（北見富士）がある

《渚滑川筋（オシラより上流）の様子～シコツアイノ・イホレサンらによる》

＊１０丁ばかり行くと両側山が迫ってきて流れも甚だ強い。倒木も多く舟では上がれない。

＊アフカンナイ（オス鹿のいる沢）、ヌチタン子フ（ゆるやかに流れる沢）がある
⇒　現在の地図ではアブカウンナイ川と五十二川（オシラの下流になる）

＊10丁ばかり上りハンケオチンナイ（パンケ・オチンナイ～川下の・オチンナイ）
⇒　パンケオチンナイ川（七曲）
～オチンナイは、「川尻を左右にかきわける」か「川尻の断崖多くある所」か

＊１２・３丁上りハンケトカルシ（パンケ・トゥカ・ウシ・イ～川下の・アザラシ・群生する・所）　⇒　場所不明　　～昔はここまでアザラシがやってきたという

＊５・６丁上りバンケウナウケベ（意味不明、崖は関係している）
⇒　場所不明（ホテル渓谷のやや下流部か？）
～「ウナウケベとは、上は坂が急になっているの意味」（志与古津日誌）

＊ここから山に上がってホロソウ　⇒　滝上
～「両岸はそびえ立つ高い山、そこには大きな滝がある」（志与古津日誌）

＊また7・８丁でヘテウコヒ（川の合流点）　⇒　サクルー川との合流点
～「ヘテウコヒは二股のことである。」（志与古津日誌）

＊本川を行くと、大きな岩が次々とある。それを越えると大岩を両岸に見、鳥にならなければ上がれないようなところだ。

＊17・8丁行くと、ハンケヲニシヨウマ（ニシユヲマイ）、（オ・ニス・オマ・ナイ～オ（？）・臼・ある・沢）　⇒　五区三十五線川（月見橋付近）
～ここに昔神様が作った臼があった。近年まで朽ちながらも残っていた。

＊絶壁の間を上っていくとクルタルウシシヨコツ（クッタル・ウシ・ソコッ～　イタドリ・群生する・渚滑川）　⇒　南の川

＊その上にチトカニウシノホリ（チ・トカニ・ウシ・ィ・ノホリ～我等・射ち・つけている・所・山）　⇒　チトカニウシ山
～この辺り第一の高山でユウヘツ・シヨコツ・イシカリのルベシベの三つの川の源で高くそびえる山である

《サクル一川筋の様子～シコツアイノ・イホレサンらによる》

＊右に行けばサツル（サツテ・ル～干上がる・路）

＊しばらく行くとヲロウエンサツル（オロ・ウエン・サツル～大いに・悪い・サツル）

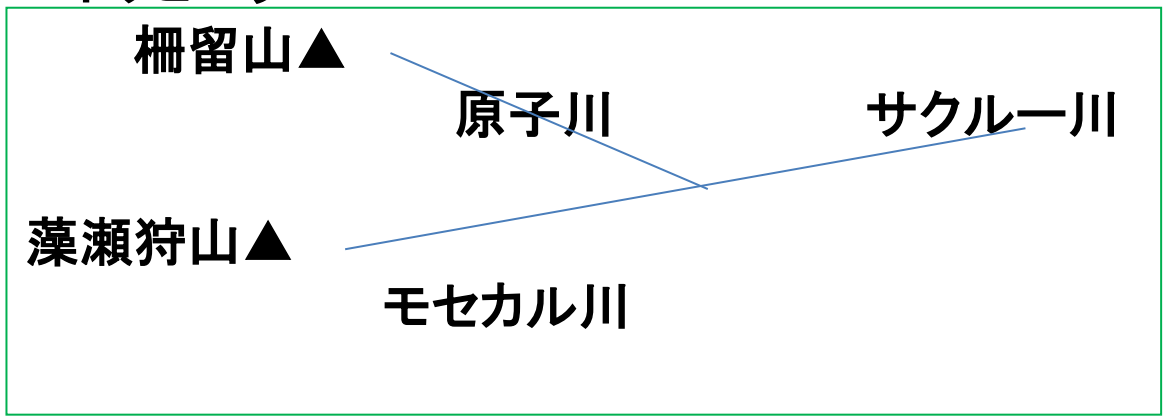
⇒　場所不明（盤の沢川？）

～この川は屈曲して両岸がそびえた所に入っていくのでこの名がついた

＊またしばらく上るとシイサツル（シィ・サツル～本当の・サクル一川）

⇒　サクル一川上流のモセカル川？

～その源は高い山でサツルノホリという　？？



＊右に少し入るとヲホサツナイ。水が少しもない。雨の日だけ水が流れる。山裾にホール。ホンテシホの山裏にあたり多くな洞窟がある。ホールとは洞窟のこと。この辺りは樺が多い。シコツアイノは毎度此処よりテシホに超えるという。

《シコツアイノが語ったこと》　松浦武四郎著『近世蝦夷人物誌』より

◎土地の名を名乗ると長生きするから、十勝出身なのに「シコツアイノ」と名乗っている。

◎衣食住は望まない。長生きして蝦夷地の行く末を見たい。

◎松前藩の支配が終わり、幕府の領地になったので今度はアイヌの面倒を見てもらえるかと思って里に下りて話を聞いたら、下のものを痛めつけるやり方は変わっていなかった。

◎昔あったようにロシアなどがやってきてアイヌを手なずけたらどうなってしまうのかと思っている。

◎和人と同じように月代（さかやき）を剃れというが、当地のアイヌは誰も剃らない。そうなれば、どのような姿にされるのかが心配だ。

◎ここ20年来、米を食べていない。

◎2年間で11頭の熊をとったが、すべて石狩と手塩の番人に売った。

◎妻と二人で、チトカニウシ、ホンテシオ、石狩岳辺りをまたにかけて生活している。

《渚滑川すじのアイヌ達の生活は？》

モヤサン
1、家主がソウヤへ。
2、夫婦のみ。
3、息子2人ソウヤへ。

ホロヒタラ
1、独身3人暮らし。
2、夫婦2人ソウヤへ。

ソウヤへ
28人
＋α

ウレトイ
1、息子2人ソウヤへ。
2、空家、全員死亡。
3、老婆一人。男多くソウヤへ。

リシリへ
4人

ウエンノツ
1、兄弟2人ソウヤへ。廃屋。
2、家主リシリへ。息子シャリへ。
娘、同居夫婦はソウヤへ。
3、息子夫婦はソウヤへ。次男は
リシリへ。三男はホロナイへ。
4、家主がソウヤへ。

他へ
2人

ベツモシリ
1、子ども、孫の5人ソウヤへ。

パラトウイトウ
1、兄弟3人ソウヤへ。廃屋。
2、妻一人。

家・集落
崩壊

キナチヤシナイ上手
1、息子夫婦と娘3人ソウヤへ。
2、息子と娘はリシリへ。

《武四郎とアイヌ達との関わりは？》　志与古津日誌より

１、雇用主と従者の関係

◎シヤリから送ってきた者に、鍋１枚、褌１枚、針２０本を与える。

◎案内した４人に酒１升、小使いに煙草二束、鍔１枚、舟子３人に褌１枚ずつ与える。

◎シコツアイノには、残った米２合半、煙草一掴み、針１０本を遣わす。
与える褌がなかったので、手拭１枚と自分の古い褌１枚を与える。
壊れた鍋しかないというので、あとで小使いに鍋を届けておくと伝える。

２、雇用主と従者の関係を超えた結びつき

◎見送りに来た夫婦に、煙草と針を与える。

◎ソウヤへ取られた後の家の朽ち果て方は、目も当てられないものだ。

◎子どもを皆取られた後の老夫婦だけの暮らしは、目も当てられないものだ。

◎私が山の中で笠を無くしたことを憐れんで、自作のキナ笠をくれた。また、その妻はアツシの前だれ１枚を餞別に貰う。

《武四郎はアイヌ民族をどのように見ていたか》

◎何年も寝食を共にする中で、アイヌ文化に深く触れる。

⇓

◎「和人とは違う文化だが、独自の素晴らしい文化である！」

◎「アイヌ文化を和人たちに知ってほしい!」

◎親孝行、誰にでも親切、自然と共存、約束を実行する誠実さ、等の人間性に感銘を受ける。

◎松前藩と結び付いた商人たちの横暴さに怒りを持ち、アイヌ民族の存亡の危機を感じ、幕府に訴える。**「同じ人間だ!」**

⇓

最終的に幕府にも明治政府にも失望して、蝦夷地を去る。